担い手育て半世紀

蒜山・中国四国酪農大学校

卒業生1200人、きょう記念式典

充実施設で実践教育推進

創立50周年を迎えた中国四国酪農大学校の本館＝真庭市蒜山西茅部

中国四国酪農大学校（真庭市蒜山西茅部）が創立して11月で50周年を迎えた。西日本唯一の酪農専門の担い手養成機関としてこれまでに約1200人の卒業生を送り出し、中四国地方を中心に全国の牧場や畜産関連団体で活躍する人材を育ててきた。高齢化による農家数の減少や環太平洋連携協定（TPP）への対応などで国内の酪農業は厳しさを増しているが、実践重視の教育を進めて次代を担うリーダーの養成を目指している。（小原一穂）

同校は1965年、中四国9県と兵庫県で構成する財団法人中国四国酪農大学校（現在は同名の公益財団法人）が農林水産省の許可を受けて開学した。前身は61年設立の岡山県立酪農大学校。当時の三木行治知事が寒村だった蒜山地域を「乳の流れる里」にと、ジャージー牛導入などで酪農振興を図る一環として酪農者養成を狙いに整備した。その後、財団法人が運営する大学校に改組され、2010年には学校教育法に基づく専修学校の認可も取得している。

修学期間は2年で、本年度は1、2年合わせて計43人（定員は1学年40人）が在籍している。近年は入学者の約7割が非農家出身で、女子学生や県外出身者も増えているが、山田義和校長は「現在、県内酪農家の約半数は本校出身者。高齢化などで担い手が減る中、地域の酪農業の発展にも大きく貢献してきた」と胸を張る。

最大の特色は、計2カ所の専用牧場でジャージー種約140頭、ホルスタイン種約90頭を飼育する充実した環境での実践教育。全学生が当番制で毎日取り組む搾乳実習に加え、ひづめを削って整える「削蹄（さくてい）」など1日3時間半の専門演習を通じて、酪農経営や飼養管理に関する知識、技術を身に付けている。

2年次には、全国各地の先進農家に計6カ月間住み込んで実務も研修。フォークリフトなどの作業機械のほか、人工授精、受精卵移植といった繁殖技術の免許取得にも積極的に取り組み、機械化による規模拡大や生産技術の高度化が進む酪農現場に即応した実践力を磨いている。

1年住元誠さん（18）は「早朝からの作業など勉強は厳しいが基本からみっちりと学べ、力になっている」。2年芦川芽生さん（20）も「実務研修でプロの仕事を経験し、気持ちが変わった。将来、酪農家としてやっていく心構えができた」と話す。

ただ酪農業を取り巻く環境は、輸入飼料価格の高騰が経営を圧迫している上、TPPによるさらなる乳製品の輸入拡大で競争激化が予想される。同校は食品製造工程の管理手法「HACCP（ハサップ）」の考え方を取り入れた良質な生乳生産技術や、6次産業化に対応した乳製品の加工技術の指導も強化していく方針。山田校長は「最先端の教育にも力を振り向け、日本の酪農業を引っ張っていける人材を育てていきたい」と意欲を見せる。

◇

中国四国酪農大学校は13日、同校で創立50周年の記念式典を開く。元校長の古好秀男氏による「創立50周年の酪農魂を顧みて」と題した講演や、植樹もある。

削蹄演習の授業に励む学生たち。実践教育で即戦力の人材育成を目指す

2015.11.13　山陽新聞